

第4項 中世以降の遺構と遺物

当調査地区では古代～中世の遺物包含層とされるⅡ層は後世の土地利用により残存しておらず、検出された全ての遺構の覆土は古代以降のものであった。全体に遺構年代を確定する出土遺物が少なく、そのため覆土の観察と周辺調査のデータから概ね中世の遺構と考えたが、P16-151から近世陶器片が出土しているのを受けて近世の可能性を含むものと改めた。

土坑9基(L55-SK125～SK133)、溝1条(L55-SD25)、その他の遺構7基(L55-SX66～SX72)、ピット8基(P16-101～180)が検出された。

出土遺物は、L55-SD25から古瀬戸の陶器壺の底部が出土したほか、遺構外から、かわらけ、陶器が出土した。

1. 溝

L55-SD25(別表2・8、図面八・二十、図版五・十四)

遺構 南北ともに調査区外へ延びる。規模は全長2.58m以上、最大幅0.46m、確認面からの深さは0.5mを測る。底面はやや丸みを帯び、壁は北側でテラスを有しながら急に立ち上がり、南側ではやや開き気味に立ち上がる。主軸はN-45°-Eを示す。P16-117を切る。P16-124とも切り合うが新旧関係は不明である。暗褐色土主体の覆土であり、色調、混入物の多寡の違いにより上下2層に分かれる。

遺物 縄文土器1点、中世の陶器壺片1点、合計2点が出土した。中世瀬戸窯(古瀬戸)壺底部片(2001)を図示した。

2. 土坑

L55-SK125(別表3、図面八、図版五)

遺構 平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸0.71m、短軸0.68m、確認面からの深さは0.19mを測る。底面は丸みを帯び、壁はそのまま緩やかに立ち上がる。暗褐色土が主体の覆土で、粘性や締まり、混入物の違いから2層に分かれる。

遺物 出土遺物はない。

L55-SK126(別表3、図面八、図版六)

遺構 平面形は楕円形を呈する。規模は長軸0.64m、短軸0.50m、確認面からの深さは0.34mを測る。底面は平坦で、壁はやや開き気味に立ち上がる。暗褐色土主体の覆土で、色調の違いや、混入物の多寡により4層に分かれる。

遺物 出土遺物はない。

L55-SK127(別表3・6、図面九・十七、図版六・十二)

遺構 北側が調査区外のため全体の形状は不明であるが、概ね楕円形を呈するものと思われる。南側でL55-SK128を切っている。検出した規模は長軸0.75m、短軸0.7m以上、確認面からの深さは0.39mを測る。底面は平坦で、壁はやや急に立ち上がる。暗褐色の覆土を主体とする。

遺物 縄文土器4点(内1点実測5078)、古代の土師器甕片1点、須恵器器瓶片1点、合計6点が出土した。

L 55-S K 128 (別表3, 図面九, 図版六)

遺構 北側をL 55-S K 127に切られているため全体の平面形状は不明であるが、概ね楕円形を呈するものと思われる。長軸0.66 m以上, 短軸0.54 m, 確認面からの深さは0.35 mを測る。底面は平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がる。暗褐色土を主体とする。

遺物 出土遺物はない。

L 55-S K 129 (別表3, 図面九, 図版六)

遺構 平面形は隅丸方形を呈する。長軸0.66 m, 短軸0.56 m, 確認面からの深さは0.24 mを測る。底面は平坦で、壁は西側で急に、東側で緩やかに立ち上がる。暗褐色土主体の覆土で、粘性や締まり、混入物の違いから3層に分かれる。

遺物 出土遺物はない。

L 55-S K 130 (別表3, 図面九, 図版六)

遺構 平面形は楕円形を呈する。長軸0.67 m, 短軸0.49 m, 確認面からの深さは0.37 mを測る。底面は平坦で、壁はやや急に立ち上がる。暗褐色土を主体とする。

遺物 出土遺物はない。

L 55-S K 131 (別表3, 図面十, 図版六)

遺構 平面形は類円形を呈する。長軸0.66 m, 短軸0.60 m, 確認面からの深さは0.13 mを測る。断面は浅皿形で、壁は緩やかに立ち上がる。暗褐色土主体の覆土で、色調や混入物の違いで2層に分かれる。

遺物 縄文土器1点が出土した。

L 55-S K 132 (別表3, 図面十, 図版六)

遺構 北側を伐根前の植栽に阻まれ調査不能なため全体の形状は不明であるが、概ね円形を呈するものと思われる。径1.17 m, 確認面からの深さは0.41 mを測る。底面は平坦で、壁は東側で垂直に、西側でやや開き気味に立ち上がる。暗褐色土主体の覆土である。

遺物 古代の須恵器片1点、中世のかわらけ1点、合計2点が出土した。

L 55-S K 133 (別表3・6, 図面十・十七, 図版六・十三)

遺構 西側が攪乱されているため正確な形状は不明であるが、概ね楕円形を呈するものと思われる。検出した規模は長軸0.96 m, 短軸0.59 m以上, 確認面からの深さは0.32 mを測る。断面形は楕円形を呈し、壁はやや急に立ち上がる。暗褐色土主体の覆土で、粘性や締まりの違いや、混入物の多寡から4層に分かれる。

遺物 縄文土器2点(内1点実測5083)が出土した。

3. その他の遺構

L 55-S X 66 (別表4, 図面十, 図版六)

遺構 平面形は楕円形を呈するものと思われる。検出された規模は長軸0.77 m, 短軸0.59 m, 確認面からの深さは0.11 mを測る。底面はやや丸みを帯び、壁は西側で緩やかに、東側でやや緩やかに立ち上がる。北側でP16-130を切る。暗褐色土主体の覆土である。

遺物 縄文土器1点が出土した。

L 55-S X 67 (別表4, 図面十一, 図版七)

遺構 平面形は楕円形を呈する。規模は長軸0.6 m, 短軸0.26 m, 確認面からの深さは0.18 mを測る。底面はやや丸みを帯び、壁は底面から開き気味に立ち上がる。暗褐色土主体の覆土である。

遺物 剥片石器1点が出土した。

L 55-S X 68 (別表4, 図面十一, 図版七)

遺構 南東側が攪乱されているため全体の平面形状は不明である。検出された規模は東西0.97 m以上, 南北0.46 m, 確認面からの深さは0.08 mを測る。断面形は浅皿形で立ち上がりは緩やかである。非常に浅い。L 55-S I 23を切る。暗褐色土主体の覆土で、ローム土の多寡で2層に分かれる。

遺物 縄文土器1点が出土した。

L 55-S X 69 (別表4, 図面十一, 図版七)

遺構 北側を攪乱に切られる。平面形は不整形を呈する。検出された規模は長軸1.89 m, 短軸1.44 m, 確認面からの深さは0.46 mを測る。底面は平坦で、壁は開き気味に立ち上がる。暗褐色土主体の覆土で、色調、混入物の違いで上下2層に分かれる。

遺物 縄文土器1点, 剥片石器1点, 合計2点が出土した。

L 55-S X 70 (別表4・6, 図面十一・十五, 図版七・九)

遺構 北側を攪乱で壊されている。平面形は不整形を呈する。検出された規模は長軸1.83 m以上, 短軸1.70 m以上, 確認面からの深さは0.26 mを測る。底面はやや凹凸を持ち、断面は緩やかに立ち上がる。断面図を記録した部分を外れた南側にテラスを有する。暗褐色土を主体とした覆土で、混入物の違いにより上下2層に分かれる。

遺物 縄文土器9点(内1点実測5019), 剥片石器2点, 古代の土師器甕片1点, 合計12点が出土した。

L 55-S X 71 (別表4, 図面十二, 図版七)

遺構 ほぼ全体が伐根前の植栽に阻まれ、検出できたのはそこからはみ出たような僅かな規模であるが可能な限り掘削し、記録を取った。平面形状は不明である。検出された規模は東西1.30 m, 南北0.75 m, 確認面からの深さは0.5 mを測る。底面はほぼ平坦で、壁はやや開き気味に立ち上がる。L 55-S I 23を切る。暗褐色土主体の覆土である。

遺物 出土遺物はない。

L 55-S X 72 (別表4, 図面十二, 図版七)

遺構 東側が攪乱され、全体の平面形状は不明である。また中央部も農業関連の掘り込みにより攪乱されている。検出された規模は東西1.02 m, 南北0.31 m以上, 確認面からの深さは0.29 mを測る。暗褐色土主体の覆土で、色調、混入物の違いにより3層に分かれる。

遺物 縄文土器3点が出土した。

4. ビット

ビットは80基が検出された。平面径の平均は0.34 m、深度平均は0.35 mを測る。断面に柱痕が観察できるものが散見され、また底部に礎盤石を有するものも見られた（P16-103）。各ビットとも灰黄褐色土を主体とした覆土であった。中には縄文土器片が出土するものも見られたが、傾斜地であることや周辺の調査データを鑑み、それらは流れ込みの遺物と判断した。ビットはそのほとんどが中～近世の所産と考えられる。調査期間中、また現場調査終了後も、掘立柱建物跡、柵列等の配列がないか検討を重ねたが明確なものはいだせなかった。

遺物は、P16-151から出土した近世陶器の鉄漿坏片1点、縄文時代土器11点、剥片2点、礎盤石に転用された縄文時代所産とみられる石皿1点、合計15点が出土した。石皿(5104)以外、小片で図示していない。

5. 遺構外出土遺物

中世の遺物は、表土から胎土が精緻で軟質のかわらけ4点、攪乱から常滑産甕片2点が出土し、近世の遺物は、Ⅲ層から備前産瓶片1点、表土から瀬戸・美濃産の磁器碗片1点と陶器鉄釉碗片1点が出土した。いずれも小片で図示していない。